

被災文化財レスキュー事業
情報共有・研究会(第1回) 東京文化財研究所

座布団圧縮袋を用いた スクウェルチ・パッキング法の検討

東京文化財研究所
2011.5.10.
木川りか・佐藤嘉則・佐野千絵
小野寺裕子・古田嶋智子

スクウェルチ・パッキング法の長所

- (+) 冷凍庫、真空凍結乾燥機などがなくても処理ができる。
- (+) とくに海水(塩水)で濡れた場合は、処理の過程で、塩水を吸い取っていくので、自然乾燥や真空凍結乾燥と比較して、塩分の残留する量が少なくなる。
- (+) 処理をしている間に、資料の整形ができる(気をつけて行えば仕上がりがきれい)。

スクウェルチ・パッキング法の短所

- (-) 人手が必要。
- (-) 時間がかかる
(2、3日おきに吸い取り紙を交換、これを5-6回(以上?))。
- (-) 時間がかかるので、カビや腐敗がひどい場合は、あまり向かないと思われる。
- (-) 水溶性インク、水溶性染料などが使用されている場合は、にじんでいく?? (要 議論)

以上のことより、
スクウェルチ・パッキング法は

- とくに海水で濡れた場合に、
- カビ、臭いが少なく、
- 人手がある場合

に向いた方法ではないか。



3.5%塩水 または 真水に3日間浸漬



比較のため一部は風乾




塩水のほうが
風乾したときの
紙の暴れ、反りは
少ないように
みえる



真水

3.5% 塩水

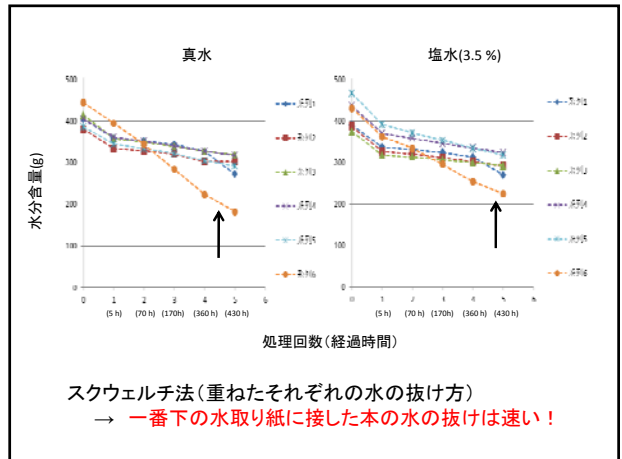
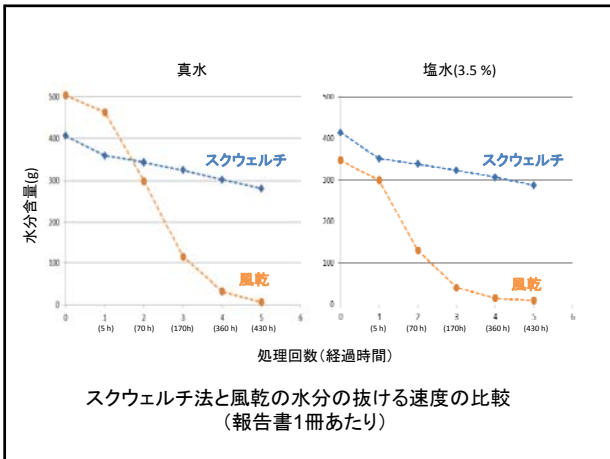


今回は、10冊を重ねて処理

- ・不織布を 本と水取り紙との接触面にはさむ
- ・水取り紙は、上と下のみ。(本の間にははさまず)
- ・座布団用圧縮袋に封入、掃除機でバキューム



座布団用圧縮袋とエスカルガゼットで使い勝手と結果を比較



スクウェルチ法を試行した結果、

- ・スクウェルチ法では、1冊の本から水分がゆっくりと、比較的均一に抜けていく (最後まで乾かせば、反りは少ないと思われる)
- ・分厚いと時間がかかる (腐りかけているものは難しいのでは)
- ・本を単純に重ねると、表紙同士の接触面で水分の移動がうまくいかず、おすすめできない。真中の本の水分の抜けが遅い! (1冊ずつにするなど、断続面がない形で実施するほうがベター)
- ・現実的な処理のためには、もう少し処理のツボをおさえるための検討が必要 (袋を有効に使う工夫も必要)